

研究資料

ブラジル格闘技の現在： 柔道 ブラジリアン柔術 総合格闘技

菱田 慶文*・中嶋 哲也**・細谷 洋子***

I はじめに

本研究は、2016 – 2019 年度におこなった科研費研究、基盤 C 「ブラジルにおける格闘技の意義」（研究課題番号 16K01712）の調査報告である。ブラジルは、格闘技が盛んな国である。カボエイラ、ブラジリアン柔術（Brazilian Jiu Jitsu. 以下、BJJ と略）、柔道、Mixed Martial Arts（総合格闘技。以下、MMA と略）などがある。本研究では、ブラジルにおける格闘技の意義を研究するため、フィールドワークを行った。貧富の差が激しく、「世界的に見てもブラジルの犯罪発生率は非常に高」（外務省, online）いとされるなか、同国において格闘技はどのような意味を持っているのか、を知る手がかりにするための調査である。インタビューしたインフォーマントの年齢は、インタビューを実施した日の年齢である。言語については、日本人インフォーマント以外は、通訳者の表現をそのまま記述した。敬称は略した。

II ブラジリアン柔術の現在

BJJ は、講道館柔道の猛者であった前田光世（コンデ・コマ）が南米武者修行中に出逢ったスコットランド系移民のグレイシー家に伝えた柔道

が現地で改良され、グレイシー柔術として誕生したものである (Jose, 2012)。現在の BJJ は立技よりグランドポジションでの攻防（寝技）が主体として行われ、ギブアップとポイントにより勝敗がつくルールとなっている。さらに、道着を着用するルールと “NOGI” という着用しないルールに類別される。

BJJ の研究者であるホセ・カイラス (Jose Cairus) によると、BJJ は、グレイシー家によって、ブラジル国内の中上流階級や政府警察の護身術として普及していた (Jose, 2012, pp.60-90)。BJJ がグローバル化するのは、1993 年コロラド州のデンバーにおいて行われた総合格闘技イベント、アルティメットファイティングチャンピオンシップ（以下、UFC と略）において優勝したホイス・グレーシーの活躍による。UFC でのグレイシーの活躍がメディアを通じて世界的に認知され、世界中に BJJ が普及するきっかけになった (Jose, 2012, pp.220-224)。そのような BJJ は、現在のブラジルにおいて、どのような状況であるのか、を報告する。

1 グレイシーを経由しない柔術 ファダ柔術の現在

グレイシー柔術以外にも、ブラジルでは異なる系統の BJJ が存在する。その代表的な系統がファ

*板橋区立高島第一中学校, **茨城大学教育学部, ***東洋大学ライフデザイン学部

ダ柔術である。しかしながら、管見の限りでは、ファダ柔術に関する学術的なアプローチは非常に少なく、2014年にYoutubeによるBJJの普及について論じたSpencer論文において、前田光世がブラジルに渡り柔術を教えた生徒の一人として、グレイシーのほかにもオスワルド・ファダがいたと言及されているのみである(Spencer, 2014, p.6)。ここでは、リオデジャネイロにあるファダ柔術の本部道場にて、2017年12月に道場関係者らから入手したファダ柔術に関して記された小冊子(写真1)に基づき、ファダ柔術の発展経緯とその特徴について概括する。

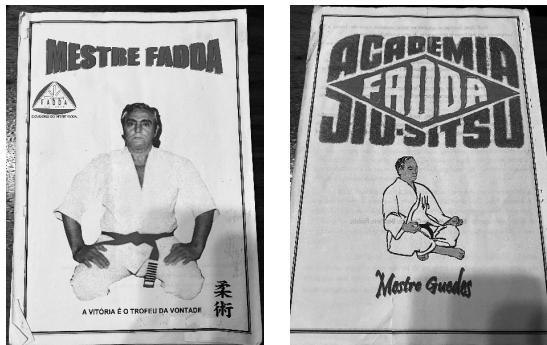


写真1 ファダ柔術の小冊子 "Mestre Fadda" (写真左 : 表紙、写真右 : 裏表紙)

ブラジリアン柔術の概略から、ファダ柔術の系譜と普及について詳述されており、A4の全65ページで発行年等の記載はない。関係者内での情報共有のために用いられていると見受けられる。

ファダ柔術の創始者であるオスワルド・バプチスタ・ファダは、1920年ブラジルのリオデジャネイロで、イタリア系移民の家庭に生まれた。そして、彼は、ブラジル人でペルナンブーゴ出身のルイス・デ・フランサ・フィーリョに柔術を学んだ。ルイスは、1916年に岡崎星史郎と佐竹信四郎(ブラジルでは Soshihiro Satake で知られている)の元で柔術を学び始め、翌年にベレンに移り、前田光世の元で学び、その後サンパウロへ移り、オオモリ・ジョージ(ブラジルでは Geo

Omori で知っていた)の元で昇段した。その後、彼はリオデジャネイロ市北部に定住した。そこでルイスは柔術道場を開き、地域の貧困層の人々を対象に柔術を教え始めた。1937年にルイスに入門したオスワルドは大変有能で、1942年に黒帯を取得し、同年には同地区の貧困層を対象に柔術を教え始めた。1950年にはファダ柔術道場を正式に開設し、ルイスの系統を継承した。こうして、BJJの新しい一派であるファダ・ブラジリアン柔術 MFJJBB (Metodo Fadda de Jiu-Jitsu Brasileiro) が確立された。その基本的なコンセプトは、倒し技の受け身技術、投げ技術、抑え込み技術、首絞め技術、関節・筋肉の固め技の実践から成り立っていた。ファダ師範は、ブラジル軍隊の訓練に護身術と柔術を導入したことでも貢献しており、長年、格闘技によるブラジル軍の軍事力の育成にも力を注いだ。また、彼の門下生には、両足を路面電車による事故で無くし、スケートボードでの生活を送っていたロウリヴァル・ジョゼ・ドス・サントスがいた。彼は身体的なハンディを負いながらも、1960年に 65kg 階級の試合で相手を首絞めで打ち負かし、このことは海外にまで報じられたという。オスワルドは、柔術を通じて、身体的ハンディを持つ人々のために何ができるのかという観点を持ち、その後も活動を展開していく。こうして、オスワルドは BJJ の多様な可能性を見出しながら、リオデジャネイロ市北部の貧困地区を拠点に普及活動を継続した。

これまで見てきたように、ファダ柔術の系統としての創始者はルイスであるが、ファダ柔術を体系化したのはオスワルドであるといえる。当初からルイスは、リオデジャネイロ市北部の低所得者層やスラム街の住人らを対象に柔術を教えており、ファダ柔術もそのスタイルを継承している。小冊子には、グレイシー一族が柔術をリオデジャネイロの高所得者層に教えていた間に、ルイスは実質的に貧しいコミュニダーチと呼ばれる地域の

人々に教えることを目指していたと明記されており、当初から、単に柔術の普及活動だけでなく、地域貢献活動の一環として彼らの柔術を位置づけ、展開していたことが看取される。

さて、オスワルドの活動は、当時の新聞にもいくつか取り上げられており、特にグレイシー柔術の活躍へ一石を投じるという立場での挑戦として、記事に記録されている。第1の挑戦として、1954年にファダ師範はエリオ・グレイシーに対する戦を申し込んだことがブラジルの大手新聞社のグローボ紙によって報じられた。対戦はリオ・ブランコ通りにあるグレイシー道場の本部で行われ、結果はファダ柔術の勝利となった。これに対して、エリオは郊外の柔術選手のテクニックに感動し、BJJは一つの一族の特権ではないことを宣言した。第2の挑戦として、1955年にファダ柔術とグレイシー柔術の選手の対戦が挙げられる。その際にも、エリオは、BJJがグレイシー一族だけのものではないことを示すために、ファダ柔術は存在する必要があるというコメントが新聞記事に報じられていた。

オスワルドは2005年に亡くなるが、現在もリオデジャネイロ市北部にファダ柔術の本部道場があり、ゲッチ師範（ルイス・カルロス・ゲッチ・デ・カストロ）を中心に普及活動が展開されている。現在の社会貢献活動としては、主に貧困層の子どもを対象に、無償で柔術クラスを実施しており、ゲッチ師範の門下生や息子らも中心となり尽力している。

2 柔道家達が BJJ へ合流

90年代にはグレイシー柔術と前項で述べたファダ柔術などが集合し、統一的な競技団体がブラジル国内で組織された（高島、2018, p.19）。そうした流れから、柔道家からの BJJ への転向も多くあったという。ここでは、ブラジルの柔道家であったバルボーザが BJJ に転向し、バルボーザ

柔術を作るまでを聞き取り調査から述べたい。

バルボーザ（50歳）は、ブラジルでは柔道の強豪として知られていた選手である。オリンピックを目指し、日本の天理大学に2年間の留学経験がある。彼は、“私は、13歳の時にバストスで柔道を始めました。馬欠場先生という厳しい先生に習いました。先生は、柔道の練習だけをするのを許さず、成績が悪いと柔道をさせてくれなかつた”と語る。そんな彼に、柔道引退後、BJJに転向し、サンパウロを拠点とするバルボーザ柔術を作った経緯について尋ねた。

バルボーザは、サンパウロを中心に BJJ を指導した為に日系人も多く、現在、日本の東海地方で働く日系ブラジル人に多く弟子を持つと言う。現在では、自分の道場だけで450人以上（300人が柔術・150人ぐらいムエタイやボクシング）を教えていると言う。今までの弟子の総数は、日本で働く日系移民達を含めると全部で2000人ちかくいるのではないか、と語った。

彼の柔道から柔術への転向の理由は、寝技を学びたかったからである。寝技を追求していくうちに、BJJの選手に寝技を学ぶことになったのである。その時に学んだのがグレイシー系のゴドイ・マカクという人物であった。1995年のことである。バルボーザは、は、“私は、柔道している時、ランニングやウェイトトレーニングは、毎日のようになっていた。スタミナは、誰よりもある。柔術の人はスタミナが私よりない。しかし、寝技の柔術の練習だけ、それで強くなっていく。それが柔術だった。私も柔道を引退した後だったから、柔術ばかりやるようになりました。それが、今のバルボーザ柔術につながったのです”と語る。

また、その頃のルールは、現在のように明確に決まっていなかったという。CBJJ（ブラジル柔術連盟）ができるばかりの頃は、“ある時は、カカト極めちゃだめ。でもある時は、良かつたりもした。バスター（相手を持ち上げて地面に叩きつけ

ること)も良かったり、悪かったりした。まだ、はっきり決まっていなかったのです”とルールが明確になっておらず、試行錯誤していたと語った。

90年代に多くの柔道家やグレイシーを経由しない柔術の実践者がBJJに合流し、現在のブラジル柔術連盟(CBJJ)の組織作りやルールの構築が行われたとみられる。



写真2 バルボーザ柔術主催 バルボーザ
50歳(2018年12月現在)

3 貧民窟におけるBJJ

リオデジャネイロには、ファベーラという貧民窟が広がっており、犯罪多発地域として知られている。そのファベーラでも近年BJJが行われるようになると、日本の情報誌において伝えられている(Marcello, 2004, p.122)。

我々が調査したのは、コパカバーナビーチから5キロ程内陸にあるカンタガーロというファベーラである。現地をガイドしてくれた日本人によれば、そのファベーラは、リオのファベーラの中でも比較的安全な場所であるという。ファベーラの入口にはUPPという治安維持警察が常駐しており、ファベーラの治安の向上に役立っているとのことであった。

ジムの代表は、ダグラス師範(2018年12月現在36歳)である。師範は、リオデジャネイロ市内のごみ収集の仕事をして生計を立てている。ごみ収集の仕事は、月額9000レアル(2018年12月

現在で約3万円)ほどの収入である。ジムの運営は、2004年から無償で行われている。近隣の貧しい子ども達に何かしてあげたい、というダグラス師範の想いから始められたという。ジム生は、もちろんファベーラに住む子ども達である。2010年の調査ではファベーラの住民はおよそ1,140万人であり、このうち約70%がアフリカ系ブラジル人である(田村ほか, 2017, p.65)。コパカバーナビーチの子どもも、ヨーロッパ系がほとんどにあるのに対して、カンタガーロの子ども達は大半がアフリカ系ブラジル人であった。ダグラス師範がBJJを教える理由は、“子ども達をストリートの犯罪から遠ざけたい、ファベーラの外の世界を見せたい、外の世界でも活躍できることを教えたいたい”などの理由で、無償でのBJJクラスを開催しているのである。子ども達の道着は、すべてが寄付で賄われているという。今は、ソーシャル・ネットワーク・サービスに“何歳の子どもがジムに入ったから、道着が欲しい”と書き込むと、どこからか寄付が届くので道着はそれで調達しているという。

ジムでは、師範による訓示が練習中に何度も見られる。特に礼儀作法については、ジムの中にいる人すべてに挨拶するように指導されており、練習の始まりと終わりには、すべての人と握手を交わしているのが窺えた。

調査中に一人の少年が練習に参加せずに、見学していたので、理由をダグラス師範に尋ねると、“ストリートで喧嘩をした為、一ヶ月の練習禁止処分とし、見学のみを許可している”とのことである。師範によれば、“ジムを出入り禁止”にしたり、“破門処分”にしたりしては意味がないという。何故なら、ジムの外にいると、ファベーラで起きる犯罪に巻き込まれてしまい、子どものためにならないからである。

このような大企業や政府からの援助のない個人的なソーシャル・プロジェクトからもBJJの世界



写真3 キッズクラス 集合写真



写真4 師範から技の説明を受ける子ども達。



写真5 練習後の挨拶は徹底される。



写真6 練習禁止処分の少年（写真奥）

大会で強豪として知られ、現在このジムからはシンガポールで BJJ を指導するアレクサンドロ・ドス・サントス・マチャド (Alexsandro dos Santos Machado 1975年9月4日生まれ) のような選手も輩出している。

III ブラジルにおける柔道教育の現在

2016年10月21日、日本の文部科学省とブラジルのスポーツ省はブラジルの公教育に柔道を導入する協力覚書を締結している。2017年9月には筑波大学がブラジルの柔道指導員7名を受け入れ、25日間の指導者研修を実施した。2018年11月27日のニッケイ新聞はブラジル講道館柔道有段者会の会長である関根隆範の発言を報じている。「汚職が蔓延する政界にあって、今ほど知育、德育、体育を並行して伝える日本の柔道が、ブラジルの公教育に求められている時代はない。柔道はブラジルには好適な幼少年指導教育だという識者が全員にいることを、我々は知っている」(執筆者不明, 2018)。

この報道では控えめに述べているが、日本ブラジル中央協会の記事では「我々ブラジル講道館は、日本人一世の有段者を中心として、日本人移民の歴史と共に歩いてきた。30名そことの小さな組織である。経済的後ろ盾も、何もないが、日本の魂を伝えたい日本柔道家の集まりである。最近は、日本人有段者だけでなく、日系人、ブラジル人の医者、弁護士、企業家などの有識者が加わり、正しい柔道の普及を願って、ブラジル柔道連盟を支援する形で活動している」(関根, online)とも述べている。有段者会は、ブラジルにおける柔道の公教育化はブラジル社会における日本人の存在感を示す上で重要な役割を担っていると考えている。それはブラジル社会への日本人の同化から距離を置く姿勢を示しているともいえる。

一方、現在のブラジル柔道の公教育化への動きは、多民族多人種国家の多様性を打ち出そうとするブラジル政府の思惑によってカポエイラが公教育化したことと一致する動向でもある（細谷, 2015）。こうした背景のなかブラジルの日本人は「正しい柔道」を伝え続けてきたという自負があるが、関根らはその内容を武士道であり、忍耐力や勤勉さであると我々に語ってくれた（1.3 参照）。

1 日本人柔道家へのインタビュー

本節では、2018年12月に篠原正夫（講道館十段94歳）、岡野脩平（ブラジル講道館名誉会長80歳）、関根隆範（ブラジル講道館会長77歳）、石井千秋（ミュンヘンオリンピック銅メダリスト77歳）にブラジル柔道の普及とその様子をインタビューしたものを報告する（於サンパウロ）。

1.1 「日本の武道は認められない時代でした。」 篠原正夫 94歳

篠原正夫（94歳）は、自身の柔道歴を次のように語った。“自分は、日系移民二世で両親が農業をしにブラジルにきました。私の頃は、武道というか柔道も剣道も認められない時代でした。私は、7歳の時から剣道を始めたのですが、16歳の時に一度、剣道の練習をしていたら、ブラジルの警察に逮捕されたのです。でも、私は子どもだったので、すぐに帰してもらうことができました。その頃、ブラジル人は柔道もあまりよく思っていませんでした。しかし、剣道よりは大目に見てくれました。武器を使わないからです。柔道を始めたのは、16歳の時です。日本から来た教師のコサカイジョウジ先生に習いました。でも、先生は、すぐに戦争に参加するために日本に帰つてしましましたので、先生には三日間しか柔道を習っていません。でも、せっかくなので、習った人間がみんなで集まって、15、6人で柔道の練習

をはじめました。もちろん、畠はないし、マットもありません。丸木に着物を巻いて、今の打ち込みのような練習をしていました。5年間ぐらいはそんな練習でした。その後、日本から来た武道館の小川龍造先生に柔道を習いました。厳しい先生でした。小川先生は、とても厳しい先生でした。間違ったことをするとすぐ破門になる。友人が一度、破門になり、みんなで許してもらえるように頼みました。明治時代の人です。私も小川先生に習ったので、同じように弟子に厳しく指導をしました。柔道は、人間の道ですからね。柔道をやることによって人間の道を行かねばならない、と教えています。”



写真7 講道館十段（故）篠原正夫
94歳（2018年12月現在）

1.2 「ブラジルの柔道は日本人の移民の歴史と密接な関係があります」 岡野脩平 80歳

“私は、色んなブラジル人から、柔道は、何故、ブラジルにおいてこれほど普及したのか、と問われてきました。私は、ブラジルの柔道は、日本移民の歴史と密接な関係があります、と答えてきました。日本移民が、植民地で生活していく中で、日本人の勤勉さ、正直さ、礼儀正しさがブラジル人に愛されてきたのです。それを象徴するのが、日本人のやっているスポーツだった。柔道、相撲、剣道も野球も陸上競技でもそうだった。そのような日本人の姿がブラジル人に信頼され、愛されてきたのです。これがブラジルの柔道普及につながったのです。私は、嘉納先生に作られた柔

道、ブラジルの柔道の根源には、武士道があるのだと思います。新渡戸稻造先生の書かれた事と同じです。武士道の精神だと思います。武士道は、礼儀正しさであったり、嘘をつかないという事であったり、一言では言えませんが、ブラジル人は、柔道の背景にある武士道を求めているのだと思います。1934年に51歳で亡くなった小川龍造という先生が、柔道と柔術良移心当流（鹿島真楊流の間違い：筆者注）をブラジルで教えはじめました。その頃、1942年にコロニアでは、日本語が禁止されたのです。しかし、小川龍造先生は、自分の道場の中では、『日本語以外は、禁止である』と宣言したのです。この武道館という道場は、全伯に広がりました。小川先生は、サムライのような人でとても日本的な人でした”



写真8 ブラジル講道館有段者会名誉会長
(故)岡野脩平 80歳
(2018年12月現在)

1.3 「柔道にはアモールがある」 関根隆範 77歳

“柔道をする子どもの保護者に言わせれば、『柔道にはアモールがある。』と言うのです。アモールとは、愛なんですよ。ルールに相手を傷つけないという愛があると言われるのです。それも武士道なんじゃないですかね。私達は、日本民族のすばらしさをブラジルの柔道史の研究することで訴えたいのです。ブラジルの柔道人口は、もはや95%が日系人以外です。今、柔道の小冊子を5万冊ブラジルの子どもに配っているのです。学校教育の一つにして下さいと市に配布しているの

です。味の素さんのような企業に協力してこのような活動を頂いているのです。我々は、日本移民がつくり上げてきた一つのエピソードを柔道から訴えたいのです。ブラジルでは、柔道も最初は、大会を開いても、何時から始まるか分かりませんでしたけど、最近では、日本人の規則正しい指導で、午前9時には、ぴったりに国歌が歌われて始まるようになりました。こういう規則正しく礼節を尽くし、約束を守るという所が、『柔道とは何か』ということを理解してくれているのだと思います”。



写真9 ブラジル講道館有段者会会長
(故)関根隆範 77歳
(2018年12月現在)

1.4 「早稲田の先輩、前田光世に啓蒙されてブラジルに来ました」 石井千秋 77歳

ミュンヘンオリンピックにブラジル代表として銅メダルを取得した石井千秋は、東京オリンピックの予選で岡野功に敗れ、早稲田大学の卒業式の翌日にブラジルに旅立った豪傑である。渡伯の目的は、“ブラジルで大牧場主になるつもりだった”と言う。石井は64年頃からのブラジルの柔道普及の様子を尋ねた。石井は、“私が渡伯した時は、日系人を中心に柔道が普及されました。64年の5月に来泊してすぐ7月に、ブラジルで行われた柔道の大会に引っ張り出されて優勝したのです。そうすると、あちこちで柔道の指導を頼まれて謝礼をもらいました。その後には、一年半ほど南米を旅してまわりました。あちこちで柔道の指

導を頼まれて、教えたり、闘ったりもしました。バーリトウドというのです。ある時は、カポエイラの選手と闘ったら、握手したらいきなり蹴ってきたり、それから次から次へとボクシングだ、レスリングだと色々な人間が挑んできたのです。そんな感じで1年半南米を旅して回ってきてから、ブラジルに戻って、私は結局、食べていくために柔道を教えることにしたのです。そうしたら、ブラジルの柔道連盟のボスからブラジルへの帰化を勧められて、本格的にミュンヘンオリンピックを目指すようになったのです。私が1972年にミュンヘンオリンピックで銅メダルを取ってから、ブラジルでも柔道がブームになってきたと思います。女子も80年代の終わり頃から増え始めたよう思います”と語った。



写真10 ミュンヘンオリンピック銅メダリスト
石井千秋 77歳（2018年12月現在）

2 柔道とソーシャル・プロジェクト

本節では、実際にブラジルの柔道家が行っているソーシャル・プロジェクトの様態を笹川スポーツ財団の沢田啓明レポートとオリンピック・リオデジャネイロ大会の女子柔道金メダリストのラファエラ・シルバ（以下、シルバと略）のインタビューから報告する。下記に沢田のレポートを引用し、ソーシャル・プロジェクトの活動を説明する。

「**【】**」

校や公共のスポーツ施設を無償もしくは安価で利用して気軽にスポーツを楽しむ環境は整備されていない（中略）中流以上の家庭では子どもを有料のスポーツクラブに通わせ、サッカー、フットサル、水泳、柔道、テニス、乗馬、バレーボール、バスケットボールなどを習わせることが多い。しかし、中流未満では経済的な理由からそれが困難で、路上や空き地での草サッカー、公園・広場などでのフットサルやバスケットボールなどの活動を除くと、子どもたちがスポーツに親しむ機会は限られている。このことは、彼らの心身の健全な発育を妨げるばかりか、路上などで犯罪グループと近くなり、窃盗・麻薬取引といった犯罪に引き込まれかねない事態を招いている。

このような状況を改善するため、主としてNGO（非政府組織）が恵まれない家庭の子どもたちにサッカー、フットサル、柔道、バドミントン、陸上競技などに親しむ機会をほぼ無償で提供し、才能がある子どもにはトップアスリートを目指す道を拓いている。スポーツ特待生として奨学金を得て高校や大学へ進学したり、スポーツ省から強化費を支給されて競技生活を続けプロ選手となったりして、子どもたちの社会的地位の向上の実現を手助けしている。このような活動は「Projeto Social」（以下：ソーシャル・プロジェクト）と呼ばれており、これらのNGOは国、州、市、一般企業などからの支援によって運営される。

このソーシャル・プロジェクトによる顕著な成功例が、2016年リオデジャネイロ・オリンピック（以下：2016年リオ大会）の柔道女子57kg級で金メダルを獲得したラファエラ・シルバ選手（25）である。

彼女は、リオ市内に700カ所以上ある貧民街（ファヴェーラ）の中でもとりわけ貧しくかつ危険で、映画「シティ・オブ・ゴッド」の舞

台ともなった「シダージ・デ・デウス地区」で生まれ育った。幼い頃からサッカーが好きで、男の子に混ざって路上でボールを蹴っていたが、気が強い性格で、周囲の人との争いが絶えなかった。娘の将来を案じた両親が、持て余すエネルギーを発散させる場を与えると、彼女が8歳のときに柔道家フラヴィオ・カント氏（2004年アテネ・オリンピックの柔道男子81kg級銅メダリスト）が主宰するNGO「レアソン学院」へ入学させた。

レアソン学院は、リオ市内のファヴェーラ4カ所に拠点をもち、5歳から17歳までの少年少女約1,000人に無償で柔道を教えている。「柔道場の内でも外でも“黒帯”になれ！」という指導理念のもと、柔道を通じて心と身体を鍛えることのみならず勉強や進学の手助けをし、希望者には職業訓練も行う。レアソン学院より推薦された優秀な選手は、奨学金を受けて高校や大学へ進学し、引き続き同学院で柔道を続けながら世界トップレベルの選手を目指す。

シルバ選手は、このような恵まれた環境で才能を伸ばし、2011年の世界柔道選手権大会（以下：世界柔道）のブラジル代表に選ばれて銀メダルを獲得した。2012年ロンドン・オリンピックにも出場したものの、2回戦で敗退した。しかし、2013年の世界柔道で初めて世界の頂点に立ち、さらに地元開催の2016年リオ大会で優勝して、母国ヒロインとなった。「柔道とレアソン学院が、私の人生を変えた。高校へ進学できたり、強化費をもらって競技生活を続けられたから、金メダリストになれた」と感謝する。

レアソン学院には、現在、シルバを含めて4人のブラジル代表選手が所属しており、他の若手の有望選手ともども、2020年の東京オリンピックを目指して厳しい練習を続けていく。ブラジルには、レアソン学院のように経

済的に恵まれない青少年に柔道を教えるNGOが10前後存在する。また、ブラジル柔道連盟（Confederação Brasileira de Judô）は17都市に練習拠点を設置して指導者を派遣し、7歳から16歳までの約2,600人に無償で柔道を教え、底辺を広げると同時にトップ選手の育成にも力を注いでいる。（沢田、online）

実際に柔道のソーシャル・プロジェクトで育てられた、シルバのインタビューから柔道のソーシャル・プロジェクトを語ってもらった。質問の内容は、“何故、金メダルを取れるほど強くなったのか、ソーシャル・プロジェクトの長所、柔道と他のスポーツとの違い”などを尋ねた。シルバは、“私は、貧しい地域で育ったから欲しいものがあれば、闘ってでも、争ってでも勝ち取りにいかなければならなかったから、自然と強い心ができました。子どもの頃は、自転車も持っていました。しかし、柔道を始めて15歳でブラジル強化選手に、そして金メダルを取った後は、家族も養えるようになりました。ソーシャル・プロジェクトの良さは、子ども達が危険な方向へ行かないようにしていること、ドラッグや犯罪から遠ざけるようにしていくことがすばらしいと思います。そして、柔道と他のスポーツの違いは、あまり分かりませんが、柔道は、嘉納治五郎先生の教えとか、道徳とか、尊敬があるところだと思います”と答えた。



写真11 リオオリンピック金メダリスト
ラファエラ・シルバ
(2018年11月現在 講道館)

引退したら何をしたいか、と尋ねると、“姉と一緒に柔道場を開きたい”と答えた。また、“ファーベーラの子どもに対しては？”と尋ねると、“もちろん柔道を教えたい”と答えてくれた。彼女のサクセスストーリーは、柔道ソーシャル・プロジェクトの目的を達成しているといえるだろう。

IV ブラジルにおける総合格闘技の現在

ブラジルは、アフリカ起源のカポエイラの他、先に述べた柔道、柔術の他、石井千秋が南米の各地で闘ったようにバーリトウドという“何でもあり”の闘いが各地で行われる。BJJの祖であるグレイシ一家もそのバーリトウドの試合を行ってきている。それがアメリカのUFCに始まり、世界各地で行われているMMAの原型となっている。本章では、2018年12月にパラナ州クリチバで総合格闘技・シュートボクセ・アカデミー(Chute Boxe Academy)を主宰するフジマール・フェデリコ(以下、フェデリコと略)と世界的な総合格闘技の選手であるバンダレイ・シウバ(以下、シウバと略)へ実施した聞き取り調査の結果を述べたい。なお、シュートボクセとは、“蹴るボクシング”的意味である。

1 「格闘家の新しい世代を育てたい」

フジマール・フェデリコ 54歳

世界の総合格闘技の興行に選手を送り込むフェデリコに、シュートボクセの会員数、シュートボクセの技術の形成、総合格闘技の実践者の気質、シュートボクセのソーシャル・プロジェクトについて質問した。

フジマールは、“シュートボクセの会員数は、全部で競技人口1万人はいるんじゃないかな。ブラジル国内ではサンパウロと、リオデジャネイロは一つ今開いたところ、サンタカタリナ、ブラジル北東部にもある。アメリカには4つ、オースト

ラリアに1つ、あとスペイン。イタリアのローマに1つです。日本はまだないですね。シュートボクセが取り入れたテクニックは、バーリトウドと呼ばれていますが、主にムエタイとBJJです”と答えた。

さらに、“シュートボクセは、スタンディングファイトがメインですから、多くの生徒が路上のケンカをするのではないですか”という質問に対してフジマールは、“もう今は、そのようなことはありません。昔はありましたよ。そのようなことをしたらアカデミアからも罰せられます。そのようなことをしたら、もう一緒にトレーニングをすることはできません。昔は、誰が一番強いんだ、おまえか？おれか？などと言いながら喧嘩が路上でよくありました。みんなどの格闘技が一番強いのか、どのアカデミアが一番優れているのか試してみたかったのです”と答えた。

続いて、シュートボクセは、“ソーシャル・プロジェクトを行っていますか”と質問すると、“我々はソーシャル・プロジェクトを週に1,2回やっています。無料でクラスを開講しています。皆の善意でやっています。アカデミアの外で、例えば教会とかで、貧困層の方々を対象に行う場合は、すべて無料です。その中でも選手になりたい人がいたら、その人にはアカデミアに連れてきています。家族が貧しいような経済的に困難な人の場合は、アカデミアで練習してもレッスン代は取られません。しかし、プロの選手になって外の試合などで稼げるようになったら、今度は、その人たちがアカデミアにお金を払うのです。ソーシャル・プロジェクトに対して、国からの支援などはありません。我々だけでやっています。普通の人が会員としてシュートボクセを習うには、月に150 レアルかかります。約50USドルですね。それはレッスン代なので、それ以外にユニフォーム代が必要ですね”と答えた。

フジマールは、“将来的に、格闘家の新しい世

代を育てたいです。今、新しい若い人たちのクラスを準備しているところです。青年期の子ども、16歳、17歳くらい。20歳とか。私たちは、4、5年先に成果が出るように今取り組んでいます。毎日そのために働いていますが、成果が出るのは、今から4、5年先のことです。そのために今は投資している”という。“バンダレイ・シウバ氏は、スカウトしてきたのですか”と問うと“彼は、お金を払って習いに来たのです。しかし、その後に素晴らしい成果を出したので無料になりました。選手としてアカデミアを修了したら、賞金のうち、70%はその選手の稼ぎで、30%はアカデミアに払わないといけません。その30%は、わたしが貰うのですが、それはトレーニング代とエージェント費用、アカデミアを維持するスタッフとかの経費にあてる為のものです”とプロ選手のマネジメントをしていることも語ってくれた。



写真 12 シュートボクセ・アカデミー主宰
フジマール・フェデリコ 54歳
(2018年12月現在)

2 「ブラジルの学校教育に格闘技を導入したい」 バンダレイ・シウバ 44歳

シウバは、日本の総合格闘技イベントPRIDEやUFCなどで活躍したブラジルの格闘家である。そのようなシウバは、2018年にパラナ州連邦下院議員選挙に立候補し落選している。シウバに“何故、政治家を目指したのか”と尋ねると“学校教育に格闘技を導入したかったのだ”と語った。

シウバは“自分の夢は、ブラジルの学校教育に格闘技を導入することです。その理由は、格闘技に教育的な意義があるからです。格闘技をすると、まず、礼儀を覚える。有り余ったエネルギーを格闘技に向かわせることができる。そして、試合をすることで、もっと学ぶ。勝つことを覚えれば、同時に負けることも覚える。試合の日が決まって、対戦相手が決まって、その対策を考えること、試合会場に向かうこと、すべてが教育になる。それらがすべて教育になるのだよ。そして、試合をした子どもは、自信を持つのです。私は、子どもの頃はシャイで自信がなくて、思ったことが言えなかつたが、自分自身に自信をつけていったのです。また、格闘技をする同じ目的をもったグループの一員になることも良い。タバコは吸わない。お酒も飲まない。薬などにも手を出さない。いい仲間と一緒にいることは、良い教育になるのです。仲間がいることは、本当に大切です。チームを作って試合に行ったりして、自分が一人じゃないということを知るのが大切なのです。とくに、親がいなかつたり片親だったり、共働きしていたら、自分がどこに所属しているか、分かりません。しかし、格闘技のチームに入ることで自分には、居場所があること、仲間がいることを理解するのが大切なことだと思うのです”と語った。

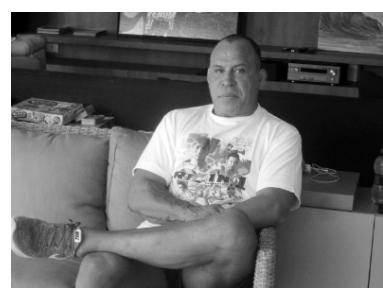


写真 13 バンダレイ・シウバ 44歳
(2018年12月現在)

V まとめにかえて

本調査では、ブラジルにおけるBJJ、柔道、MMAの調査を行った。まず、初めに日系人が普及した柔道がブラジルの格闘技文化に強く影響を与えたと言えるだろう。柔道を伝えてきた日系移民の柔道指導者達は、礼儀や規律を守る等などの道徳を大切にしながら普及したが、このことが現在のブラジルにおける柔道の評価や競技人口の多さにつながっているのである。

グレイシ一家が柔道をバーリトウドで勝てるようになると、普及したのがBJJである。BJJの成立初期には、グレイシ一家が富裕層向けに護身術として普及していたが、現在は、貧困層にも小規模なソーシャル・プロジェクトを通じて行われている様子が窺えた。さらに、貧困層を中心に浸透したファダ柔術や多くの柔道家との交流からBJJの組織化もすすみ、90年代にはCBJJ（ブラジル柔術連盟）が設立されていることも分かった。

バーリトウドを目的としたMMAのジムでも貧困層の子ども達に、ソーシャル・プロジェクトの一環で格闘技を教えていたりする様子も窺えた。プロ興行のトップ戦線で闘う選手も“格闘技は教育になる”と語っている。その理由は、自らの身体を鍛えることで自信を身につけ、自分のエネルギーを良い方向に向かわせること。自分の居場所と良い仲間がいるということを理解する事が大切である、という考えであった。

調査の結果、格闘技をブラジル社会に位置づけて調査するためには同国におけるソーシャル・プロジェクトという制度や観念についても理解を深める必要があることが分かった。今後は、ソーシャル・プロジェクトの理解を深め、更に、ブラジルの格闘技を研究していきたい。

※本稿の掲載写真はすべて筆者撮影によるものである。

【文献】

- 著者不明, *Mestre Fadda: A vitória é o troféu da vontade* 柔術.
外務省 (online) 外務省海外安全ホームページ. https://www.anzen.mofa.go.jp/info/pchazardspecificinfo_2020T104.html#ad-image-0 (accessed 2022-3-31)
- 細谷洋子 (2015) アフロ・ブラジル文化 カポエイラの世界. 明和出版.
- Jose, Cairus. (2012) *The Gracie Clan and the Making of Brazilian Jiu-Jitsu: National Identity, Culture and Performance, 1905 - 2003*. A dissertation submitted to the Faculty of Graduate Studies of York University.
- Marcelo, P. Alonso (2004) 貧民窟が生んだ天才柔術家フェルナンド・テレレ. 柔術王：ブラジリアン柔術を喰らえ！(Inforest mook). インフォレスト : 122-125.
- 沢田啓明 (online) NGOによるソーシャル・プロジェクト. <http://www.ssf.or.jp/research/international/spioc/br/brazil/tabid/1305/Default.aspx>. (accessed 2021-6-15)
- 関根隆範 (online) 連載 52：柔道教育を通じた、未来の国 ブラジルの進化. <https://nipo-brasil.org/archives/11721/>. (accessed 2019-6-21)
- 執筆者不明 (2018) 学校教育に柔道導入を. ニッケイ新聞. ニッケイ新聞社.
- Spencer, D.C. (2014) From Many Masters to Many Students: YouTube, Brazilian Jiu Jitsu, and communities of practice. *JOMEC Journal*, (5):1-12.
- 田村梨花・三田千代子・拝野寿美子・渡会環共編 (2017) ブラジルの人と社会. 上智大学出版.